

道徳通信かがわ

第32号

平成30年9月21日（金）

香川県教育委員会事務局

義務教育課

友達から「おそろいの筆箱を買おう」と誘われたまゆみ。しかし、お母さんから「この前、買ったばかりでしょう。」とたしなめられます。腹を立てたまゆみに、お父さんは自身の子どものころの経験を語り始めます。それを聞いたまゆみは、次の日の朝、友達に断りに行くのでした。

この「友達のしょうこ」（学研）という教材を用いた4年生の授業を紹介します。丸亀市立飯山北小学校、美甘彩由里先生の実践です。

言葉に耳をかたむけて —学力向上モデル校の授業から—

授業では、お父さんの話を聞いたまゆみの心の中を、「買う」「買わない」「迷う」の三つの視点から選び、それぞれの思いを語り合いました。子どもたちからは、素直な心の中が紡ぎ出され、それゆえ、その言葉は魅力的でした。

「買う」を選んだ子どもの中に、「同じ筆箱を持っていたら、周りから本当の友達に思われる。」と発表した子がいました。本当はその子は、それが真の友達の在り方とは感じていないのかもしれませんが。「思われる」という言葉に「見せかけの」という思いが垣間見えます。

「買う」派と「買わない」派で役割演技をした時には、「買う」派の説得に、「買わない」派の子どもが、一瞬言葉を詰まらせる場面がありました。言葉が詰まるのは、本気で考え、自分の心の中を話そうとしている証拠。決まり切ったきれいごとを並べるだけの会話では、言葉は詰まりません。ですから、言葉が詰まることも心の表現です。授業者は、「今、ちょっと言葉が詰まったよね。どうして。」と立ち止まり、その時の心を見つめさせました。

友達の心の言葉に耳をかたむける中で、「買う」と言っていた子どもが「買わない」に変わる場面がありました。一方で「買わない」と言っていたのに「買う」に変わる子どもも現れました。大人が望む姿を演じるのではなく、どこまでも自分の生き方を、自分で考えていこうとする学びの姿でした。

道徳的価値は、「Aさんは、物を大切にしている心が育っている。それに比べてBさんは…」と人を計るためのものではありません。そうではなく、道徳的価値は、自分はどんなふうに生きていけばよいのかを考えるための「心のものさし」です。

「自分は、これまで物を大切にしてきたかな。」

「がまんすることが大事なことは分かった。でも、『一緒に買おう』と誘われたら、自分は…。」

自分にとって大切な生き方はどんな生き方かを考え、出し合い、受容される。本心を出し合える道徳の授業は、そんな学びの積み重ねから生まれるのでしょうか。

まさに、この日の子どもたちのような。